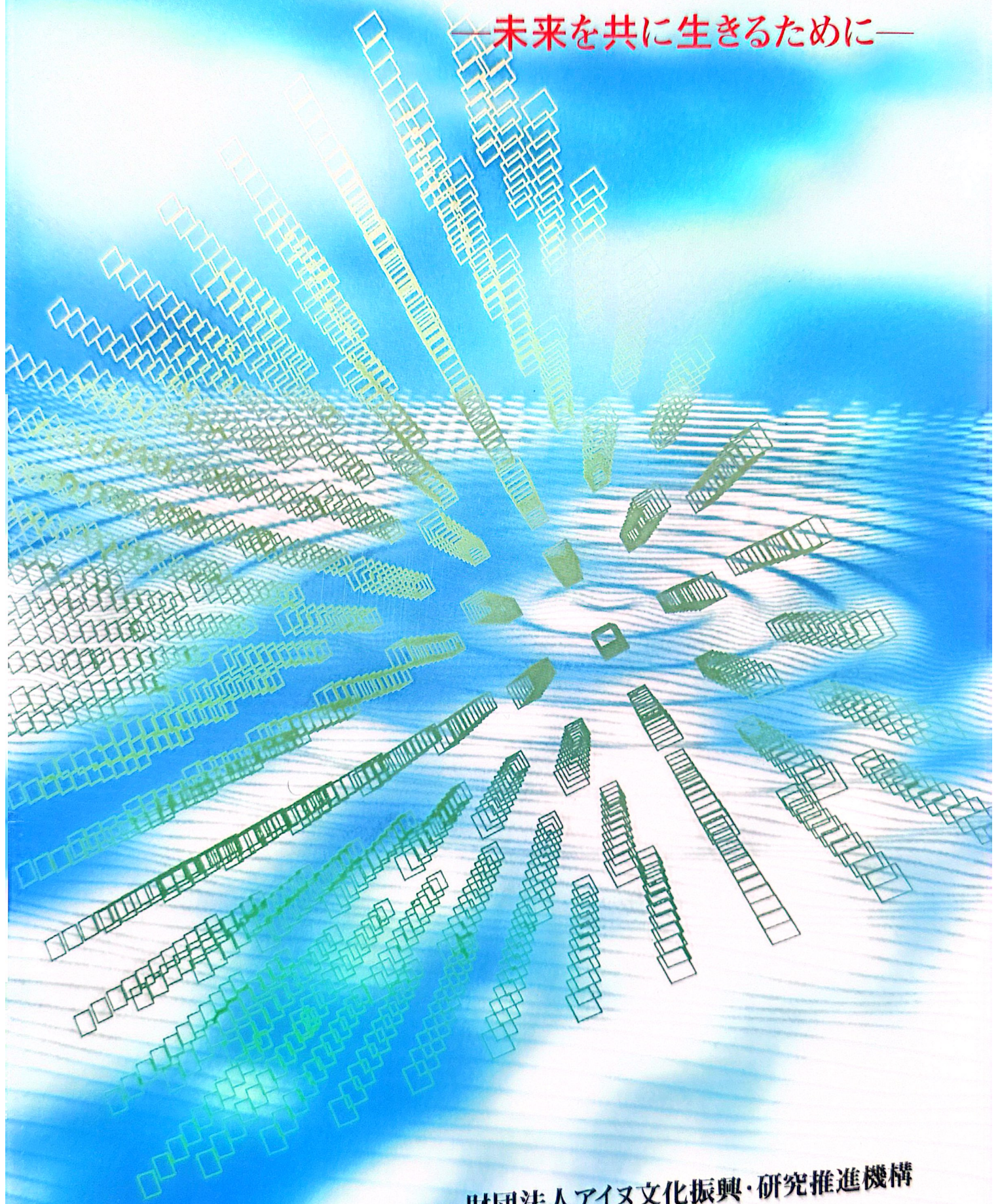


SL02

アイヌ民族:歴史と現在

—未来を共に生きるために—



財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ民族:歴史と現在

—未来を共に生きるために—

【小学生用】



財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

目次

はじめに	5
I. 土器を使い始める前の時代	6
II. 縄文時代の文化	8
〈土器作りのはじまり〉	8
〈北海道の土器〉	8
〈さまざまな文化のつながり〉	9
III. 7～13世紀の政治・社会 —東北地方の蝦夷—	11
〈古代国家にとっての異民族の意味〉	11
〈東北地方北部と古代国家〉	11
〈蝦夷の社会〉	12
〈鎌倉時代のエゾ〉	12
〈まとめ〉	12
IV. 1～13世紀の文化	14
〈続縄文文化〉	14
〈擦文文化〉	15
〈オホーツク文化〉	15
〈土器文化の終わり〉	16
V. 13～17世紀の政治・社会	18
〈元・明とサハリン（樺太）のアイヌの人たち〉	18
〈安藤氏の内乱と鎌倉幕府の滅亡〉	19
〈コシャマインの戦い〉	19
〈松前藩の成立〉	20
〈シャクシャインの戦い〉	21
VI. 13～17世紀の文化	22
〈擦文文化の終わり〉	22
〈14・15世紀から江戸時代まで〉	23

VII. 17～19世紀の政治・社会 25

- 〈シャクシャインの戦いから18世紀なかごろまで〉 25
〈18世紀の後半〉 26
〈クナシリ・メナシの戦いの後〉 28
〈明治時代のはじめ〉 28

VIII. 17～19世紀の文化 29

- 〈『オムシャ図』に見るアイヌ文化〉 29
〈家と暮らし〉 31
〈物語〉 31

IX. 明治・大正から戦前までの政治・社会 32

- 〈アイヌ民族の日本国民化と開拓〉 32
〈開拓の本格化と「北海道旧土人保護法」〉 33
〈大正時代から戦争中の時代〉 34

X. 現代の政治・社会 35

- 〈国内の政治の動き〉 35
〈国内の社会の動き〉 36
〈国際政治とアイヌ民族〉 37

XI. 近代・現代の文化 38

XII. アイヌ語 41

- 〈アイヌ語とは〉 41
〈アイヌ語の話されていた地域、話されている地域〉 41
〈アイヌ語地名〉 42
〈アイヌ語はどんな言葉か〉 42
〈アイヌ語の過去と現在〉 43
〈アイヌ語を守るための動き〉 43

XIII. 北海道のヒト —骨の特徴から考える— 44

はじめに

この本は、アイヌ民族^{みんぞく}について小学生のみなさんに知ってもらうために作られました。

今の日本の社会科の教科書に書いてあることは、ほとんどが和人^{わじん}*の社会や文化^くについてです。しかし、日本には和人だけが暮らしてきたのではありません。アイヌ民族も、昔から日本列島^{れいとう}に住んできました。そこで、アイヌの社会や文化のうつりかわりについて教科書に書いてあることを補^{おぎな}うのが、この本の役目^{やくめ}です。

そして今、日本にはさまざまな民族が暮らしています。日本中でこの本を読んでいる小学生のお友だちにも、さまざまな民族がいます。アイヌ民族も和人^{わじん}も含め^{ふく}、みんなが互^{たが}いのことをよく知ったうえで、これからの社会を作っていかなければなりません。

大昔から今までのことを小さな本のなかにまとめました。なかには少し難^{むずか}しくて今読んでもよくわからないところもあるかもしれません。どうかこの本を大切に^{大切に}して、高学年になってからも、何度も読み直してみてください。

*「和人」は、今の日本のなかで一番人数の多い人^{ひと}たちを、アイヌ民族と並べて呼ぶときの呼び名です。同じ読みかたで「倭人^{わじん}」という漢字^{かんじ}もあります。これは昔の中国の人が日本に住む人のことを指して呼んだ名前です。

I. 土器を使い始める前の時代

最近あちこちで、大昔の人たちが使った石器（石で作った道具）が発見されています。それで、日本列島には、数万年前から人が住んでいたことがわかってきました。北海道でも、同じくらいの古さの石器が発見されました。

2万年くらい前には、皮をなめし*たり、ものを削るための道具として、石を割っただけの薄い石器を使っていました。

1万8千年くらい前の地球は氷河期といって、とても寒く、北海道とサハリン（樺太）・

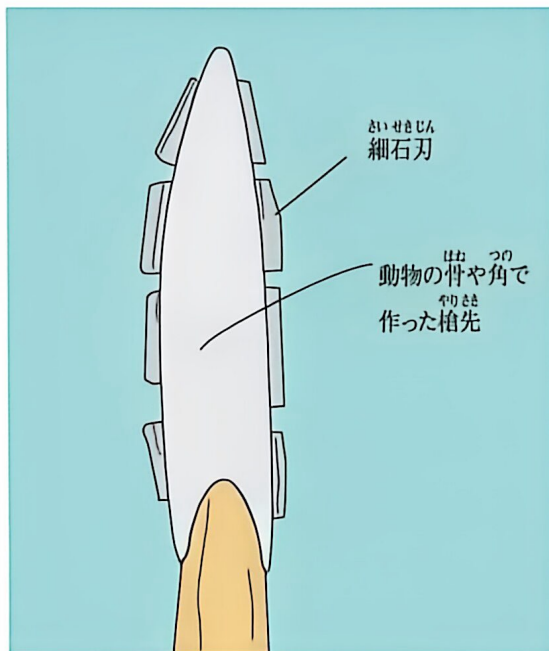
アジア大陸の間にはずっと陸地がつながっていました。人びとは、そこを自由に行き来していたようです。

このころ、細石刃という小さな石器が作られていました。厚さ1～2mm、長さは数mmから数cmくらいの小さなカミソリの刃のようなもので、これを動物の骨や角で作った槍先や銚先に埋め込んで使ったようです。埋め込んだ細石刃がこわれたら、刃

を付け替えるだけでいいので、ずいぶん便利になりました。

*皮をなめす

動物の皮から毛や脂をとりのぞいてきれいにし、柔らかくすること。

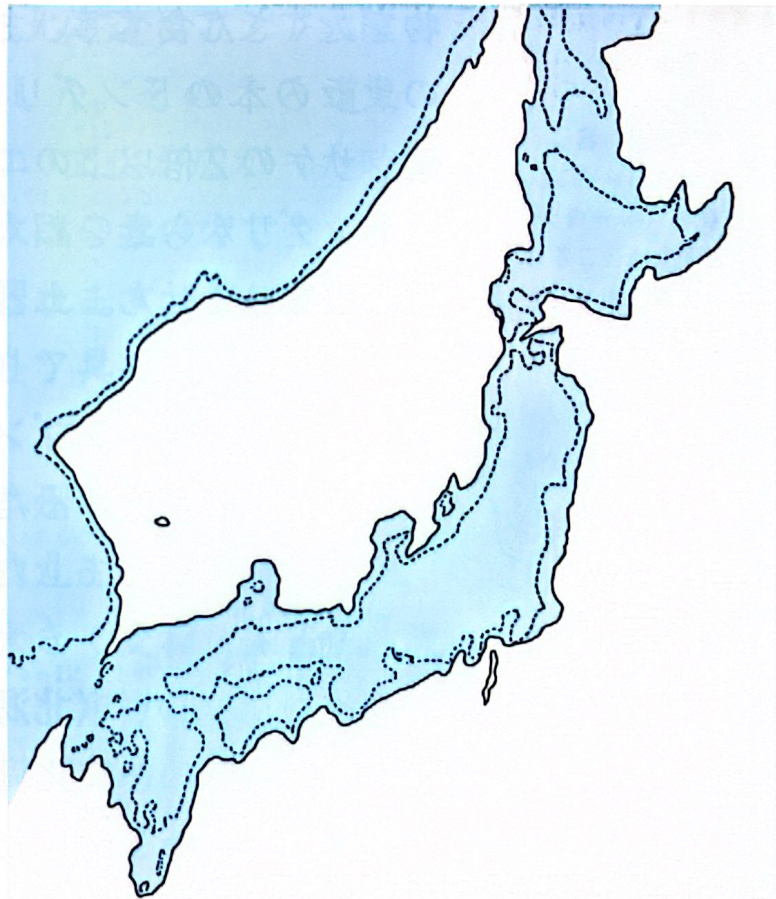


図I—1: 細石刃
槍先の横側の溝に細石刃が埋め込まれています。

やがて、だんだん^{あたた}暖かくなつたため、マンモスなどの動物たちは、北へ^{もと}戻ったり死んでしまつたりしました。細石刃を使った人たちのほとんどは、今、北海道で見ることのできるクマやシカ、サケ・マスをとって暮らしていたようです。

そのころの人たちは、^{じゅうきよ}たてあな住居*に住んでいたろうと思われますが、家のあとが見分けにくくなっているので、はっきりしたことはわかりません。お墓^{はか}からは、きれいな石の玉が

^{べんがら}ベンガラ* という赤い粉^{こな}といっしょに出てきました。ベンガラは昔から、お化粧^{けしょう}のように顔^{かほ}に塗^ぬるだけでなく、亡^なくなつた人の上に^ふ振りかけてあることが多いものです。



*たてあな住居^{じゅうきよ}

地面^ひを掘り下げて作つた家のこと。5～6人くらいの家族が住んでいたようです。

家のまんな中には「いろり」がありました。

*ベンガラ

鉄分^{てつぶん}を含んだ赤い^{こう}鉱石^{こうせき}を焼^やいて粉^{こな}にしたもの。

図 I—2: 約 2 万年前^{やく 2 まんねん}の日本列島^{にっぽん れっとう}
海面^{かいめん}を今より 140m 低くしてみた図です。

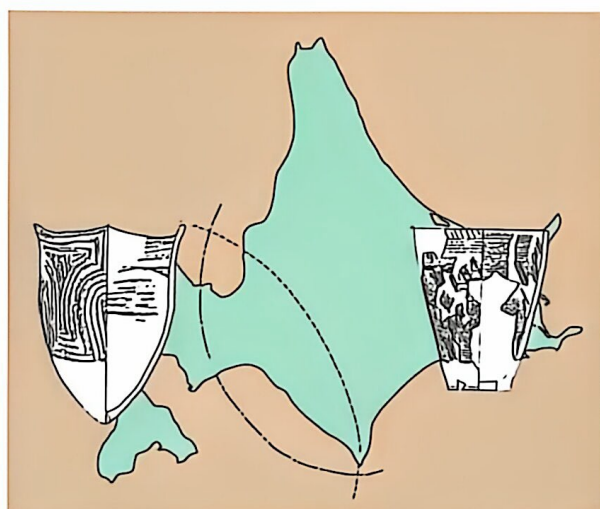
Ⅱ. 縄文時代の文化

〈土器作りの始まり〉

日本列島では、今から1万2千年ほど前に、土器作りが始まりました。ここから後の時代を縄文時代といいます。

縄文時代の人たちという、狩りをする姿をすぐに想像してしまいがちですが、実際には動物の肉よりも、自然に生えているドングリなどの植物をたくさん食べていました。とくに、東日本のナラの木のドングリは、シカやクマの約3倍、サケの2倍以上のエネルギーになります。

ドングリから毒をぬくためには湯をわかさなければなりません。土器はそのために便利な道具でした。また、イモ類のデンプンを消化しやすいものにするためにも煮る必要がありました。



図Ⅱ-1:土器の形にあらわれる道南と道東の違い
どちらも縄文時代早期の土器です。

〈北海道の土器〉

北海道の土器は、南の方(道南)と東の方(道東)では形が違います。道南の土器は底がとがっていますが、道東の

土器は底がたいらです。

道南の土器は本州の東北地方の土器と似てい

ます。

道東の土器には本州と違うところがあります。道東では細石刃文化さいせきじんのころに土器が作られ始めましたが、ドングリを食べていたようすがありません。ドングリを粉こなにするための道具もほとんど見つかっていません。道東の土器は、本州からドングリとの関係で伝わってきたのではないのかもしれませんが。

 細石刃文化
6ページの本文を
参考にしてください。

〈さまざまな文化のつながり〉

縄文時代の初めごろ、北海道とアジア大陸の間は海になっていました。そのころ道東に石刃鏃文化せきじんぞく*という新しい文化が広がった時期がありました。アジア大陸たいりくの北の方で生まれた文化が伝わったと考えられます。この文化の遺跡せきからは、軽石かるいしでできたクマの頭の彫り物ほものなどが発見されています。

北海道の縄文文化は本州の文化ともつながっています。青森県あおもりけんの三内丸山遺跡さんないまるやま いせきが発見され、縄文時代のイメージは大きく変わりました。直径1mのクリの木で作った建物の跡たてもの あとをはじめ、北海道から新潟までを結ぶ交易にいがた むす こうえきのようす、いろいろな植物を育てたようすなどから、縄文時代の豊かさが伝わってきます。北海道の千歳市ちとせしでも同じように、大きな柱はしらを立てた遺跡が発見されました。このような遺跡は、石川県いしかわけんや滋賀県しがけんでも見つかり、文化のつながりが感じら

せきじんぞく *石刃鏃文化

道東の7～8千年前くらい前の遺跡から、石刃（ブレード）という石器に簡単に手を加えて作られた特殊な鏃（矢の先端）が発見されることがよくあります。普通、縄文時代の遺跡から、このような石の鏃は出てきません。そのため、この文化を特別に「石刃鏃文化」と呼びます。

れます。

また、道東で、イルカの頭の骨をきれいに並べて何段にも積み重ね、その上にベンガラがまかされているのが発見されました。トドのお墓にベンガラをかけたのも見つかっています。これはイルカやトドのたましいを神の国に送るお祈りの跡ではないかと考えられます。

湿地帯の水の中から発見された木の入れ物には、北海道内のずっと後の時代の遺跡から発見された入れ物とそっくりなものがあり、文化が受け継がれていることがわかります。また、シ

ラカバの木の皮の入れ物は、アジアの北の方に住むいろいろな民族に共通してみられます。

クマの形をした彫り物、土で作ったシャチ、フクロウの形をした把手のある土器など、いろいろな動物の形をしたモノが発見されています。これらには後の時代のアイヌ文化と共通したところが見られます。アイヌ文化の始まりを考えるときには、まず縄文文化から考える必要があります。



写真Ⅱ—1:土器につけられた動物のかたち

上:クマ 下:フクロウ

どちらも千歳の美々4遺跡から出土したものです。

Ⅲ. 7～13世紀の政治・社会—東北地方の蝦夷—

〈古代国家にとっての異民族の意味〉

このころの日本の国の指導者たちは、日本も中国の皇帝を守る国の一つだとして遣隋使や遣唐使*を送っていましたが、自分たちもまた異民族を従えた国だと考えていました。そして自分たちの支配地域の北側に住む人々を異民族だと考え、「蝦夷」「夷」などと書き、また「エミシ」「エビス」「エゾ」などと呼んでいました。このころの蝦夷についての記録は、そうした意味を持って書かれています。

けんずいし けんとうし
*遣隋使・遣唐使

随や唐（このころの中国の王朝）に送られた日本の使い。

〈東北地方北部と古代国家〉

8世紀になると、朝廷*の勢力が今の秋田県から宮城県にまで広がりました。8世紀の末には、蝦夷のなかから任命された役人である伊治麻呂が朝廷に戦いを起こしました。これに対して送られた大軍を、アテルイを指導者とする蝦夷の軍が破りました。その後アテルイは、朝廷から征夷大將軍に任命された坂上田村麻呂に敗れました。

ちやうてい
*朝廷

天皇が政治をおこなったところ。また天皇を中心とした政治のしくみ。

9世紀なかごろには災害やききんが相次いで、征服された蝦夷の子孫が戦いを起こしたりしました。

10世紀に、今の岩手県の一部を安倍氏が支配

するようになりました。11世紀には清原氏が勢力を持ちました。さらにそのあと、今の岩手県にある平泉を中心に藤原氏が栄えました。安倍氏、清原氏、藤原氏は現地の有力者で、蝦夷の子孫だと考えられていました。

〈蝦夷の社会〉

7世紀には蝦夷の村が大きくなって数も増えました。指導者たちは朝廷から位をもらったりして、現地での力を強めようとしていました。

人びとの暮らしには、田畑を耕す、狩りをする、魚をとる、木の実や山菜をとる、馬などを飼う、などのようなさまざまなやりかたがありました。毛皮や昆布、馬などの貿易も行われ、貿易の相手には北海道も含まれていました。

〈鎌倉時代のエソ〉

つがるちほう
*津軽地方

あおもりけん
今の青森県の一部。

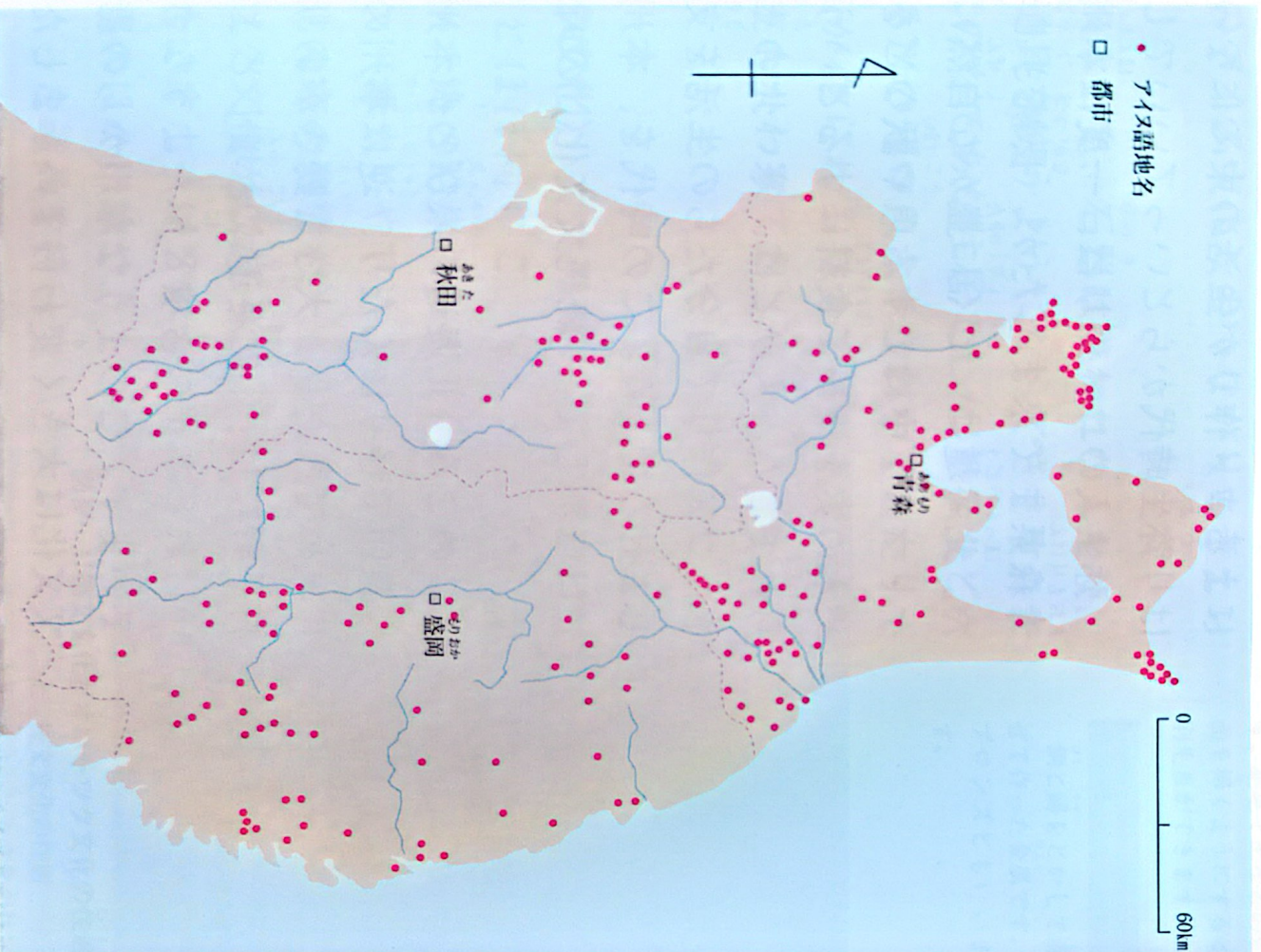
鎌倉幕府ができると、津軽地方*出身の安藤氏が代官に任命されました。鎌倉時代のなかに安藤氏が殺されたときの記録に出てくるのはアイヌの人たちだと考えられています。

〈まとめ〉

このころの制度や社会のようすからは、蝦夷がアイヌ民族であるかどうかを知ることがまだできません。このころの和人による記録のなかには、実際のアイヌ民族の活動が含まれていま

す。異民族^{いみんぞく}とはこういうものだ、和人^{わじん}が自分たちで勝手に作りあげた姿^{すがた}もえがかれています。

8世紀には東北^{とうほく}地方^{ちほう}にアイヌ語でつけられた地名^{なづ}があります。このことは蝦夷^{えみし}とアイヌ民族とを結びつける有力な証拠^{しやうこ}だと考えられています。



図Ⅲ—1:東北3県(青森県、秋田県、岩手県)にあるアイヌ語地名

IV. 1～13^{せい}世紀の文化

〈続縄^{ぞくじょうもん}文文化〉

最近^{さいきん}の研究では、地域^{ちいき}によっては縄文時代^{じょうもん}から、アワやヒエだけでなくコメも作り始めたらしいことがわかってきました。けれども、水田によるコメ作りが生活の中心になったのは、やはり弥生^{やよい}時代からといっていいでしょう。

弥生^{やよい}人のコメ作りは、一度は本州^{ほんしゅう}の一番北の青森^{あおもり}県^{けん}まで来ましたが、長^{なが}続^{つづ}きませんでした。北海道^{ほっかいどう}は、とくに豊^{ゆた}かな自然^{しぜん}に恵^{めぐ}まれ、サケ・マスを中心とする魚^{いしもの}や獣^{さんさい}などをとり、山菜^{さんさい}や木の実を集めて食料^{しょくりょう}にするという生活が続けられました。人びとは、寒い北^ふの土地には不向^{ふじ}きなコメ作りで自分たちの生活^{せいか}を支えようとはしませんでした。この時代を、本州の弥生時代とは区別^{くべつ}して、「続縄文文化」の時代とよびます。

このころ、北海道^{とうほく}の人びとが本州^{ちほう}の東北^{とうほく}地方^{ちほう}に集団^{しゅうだん}で移^{うつ}り住んだり、逆^{さか}に本州の人びとが北^{いし}に攻^せめてきたり、大きな動きがありました。石狩^{いしかり}平野^{へい}には、「北海道^{ほっかいどう}式^{しき}古墳^{こふん}」とよばれる小さいけれど本州の古墳^{こふん}と似たような古墳が作られています。このような本州からの影響^{えいきょう}で、続縄文文化は大きく変^かわっていきました。

〈擦文文化〉

9～13世紀ごろ、北海道じゅうに擦文文化が広がりました。形や作り方には本州の土器とのつながりが感じられますが、土器の表面には、「擦文」という名前のもとになった**刷毛目***がつけられています。また、刻まれた線の独特の模様は続縄文土器から受け継がれたもので、後の江戸時代のアイヌ文化とのつながりも考えられます。

このころになると、石器は使われなくなり、次第に鉄の道具を使うようになってきます。家は、四角い床のたてあな住居でした。サケなどがあがってくる川の河口に大きな村ができたり、穀物や野菜が作られるなど、暮らし方もかわってきました。

〈オホーツク文化〉

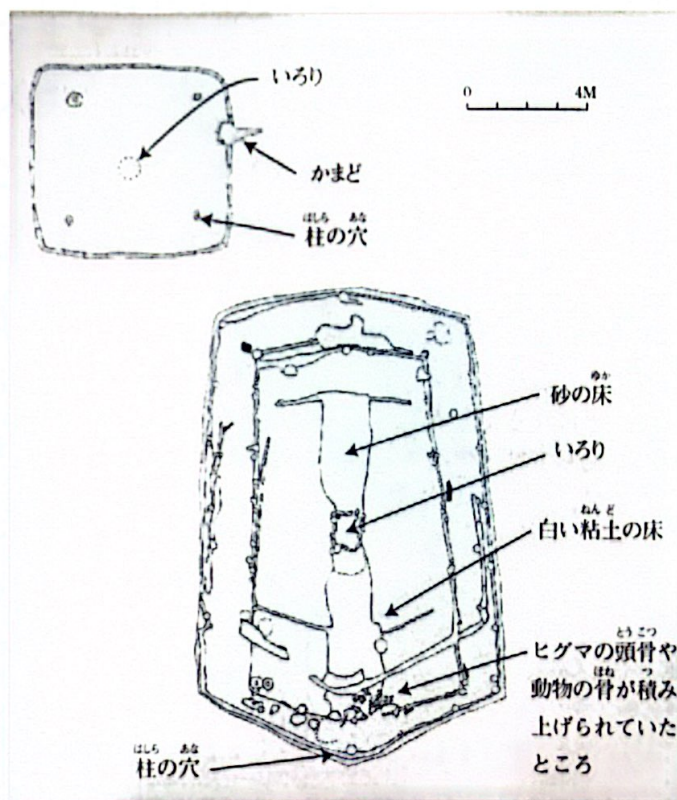
擦文文化とほぼ同じころ、オホーツク海の沿岸には、サハリン（樺太）やアジア大陸の北の方の影響が強いオホーツク文化が広がっていました。オホーツク文化は、石器のほかに鉄や**青銅***でつくった道具を持っていました。たとえば、

*刷毛目

刷毛とは、のりや漆などを塗るための柔らかいブラシのようなもののことです。普通は動物の毛で作られます。刷毛で土などの表面を掃くようにすると刷毛目ができます。

*青銅

銅と錫をとかして混ぜて作った金属です。ブロンズともいいます。



図N-1: 擦文文化とオホーツク文化の住居

上：擦文文化の住居

下：オホーツク文化の住居

オホーツク文化と同じ帯の金具がジベリアのアムール川のほとりから見つかっており、品物の交易がさかんで、人びとも行き来していたことがわかります。

家は、上から見ると床が五角形や六角形をした大きなたてあな住居でした。家の奥には、クマの頭の骨などがきちんと積み上げられていて、なにかの儀式が行われたことが想像されます。この文化は、やがて擦文文化がオホーツク海沿岸まで広がる中で力が弱まり、消えていきました。

〈土器文化の終わり〉

交易がますますさかんになるにつれ、本州からの品物を手に入れるために、交換物としての獣や魚をとることが重要な仕事になっていきました。たてあな住居は床の真ん中に「いろり」をもつ平地式の家*に変わり、土器の代わりに鉄鍋などが使われるようになりました。こうして、遅くとも14世紀までに、擦文土器文化の時代は終わりました。

その後しばらくの北海道のようすについては、これまでよくわからなかったのですが、最近は、さまざまな遺跡の調査により、後の時代のアイヌ文化がどのようにできあがってきたかということや、アイヌの人たちとまわりの人びとの接触や交流のようすがわかってきています。

*平地式の家

たてあな住居とは違って、床になる部分の地面を掘り下げずに建てた住居。



図Ⅳ-2: 続縄文、擦文、オホーツク文化期の北海道の主な遺跡

V. 13～17世紀の政治・社会

〈元・明とサハリン(樺太)のアイヌの人たち〉

13世紀に中国を征服したモンゴル帝国(元)は、九州に兵を送った(元寇*)のと同じころ、サハリン(樺太)でもアイヌの人たちと40年間のあいだくりかえし戦いました。アイヌの人たちはそのころ、貿易などを目的に北海道からサハリン(樺太)へ渡っていったと考えられています。

*元寇

元の大軍が2度にわたって北九州に攻めてきて、鎌倉幕府の反撃と大暴風雨のために逃げ帰った戦い。



図V-1:アイヌの人たちは、このころ太い線のような道すじをたどっていたようだ。

元がほろび、中国に明の王朝おうちやうがおこるころまでに、アイヌの人たちはサハリン（樺太）に定住ていじゅうするようになりました。そしてサハリン（樺太）のアイヌの人たちは明と貿易をするようになりました。

〈安藤氏の内乱と鎌倉幕府の滅亡〉

同じころ、東北地方とうほくちほうでアイヌの人たちが戦いを起こしました。この戦いは、鎌倉幕府から東北地方の代官だいかんに任命にんめいされていた安藤氏あんどうしの一族いちぞくどうしの戦いを引き起こし、とうとう鎌倉幕府が滅びる原因げんいんの一つになりました。

〈コシャマインの戦い〉

1457年、北海道の渡島半島おしまでアイヌの指導者しどうしゃコシャマインが和人と戦いました。この戦いのきっかけは、和人の鍛冶かじ*がアイヌの男性だんせいを殺したことでした。その後100年間ほどのあいだ、アイヌの人たちと和人とのあいだの戦いや、アイヌの人たちを巻き込んだ和人どうしの戦いが続きました。

13世紀から15世紀のあいだ、東北地方から北海道・サハリン（樺太）にかけては、アイヌの人たちや和人を含めた貿易などが活発に行われ、ときにはお互いの利益りえきをめぐって戦いになることもあったのです。

*鍛冶

鉄などの金属きんぞくをたたいたりして加工し、道具類どうぐをつくること。また、つくる人のこと。

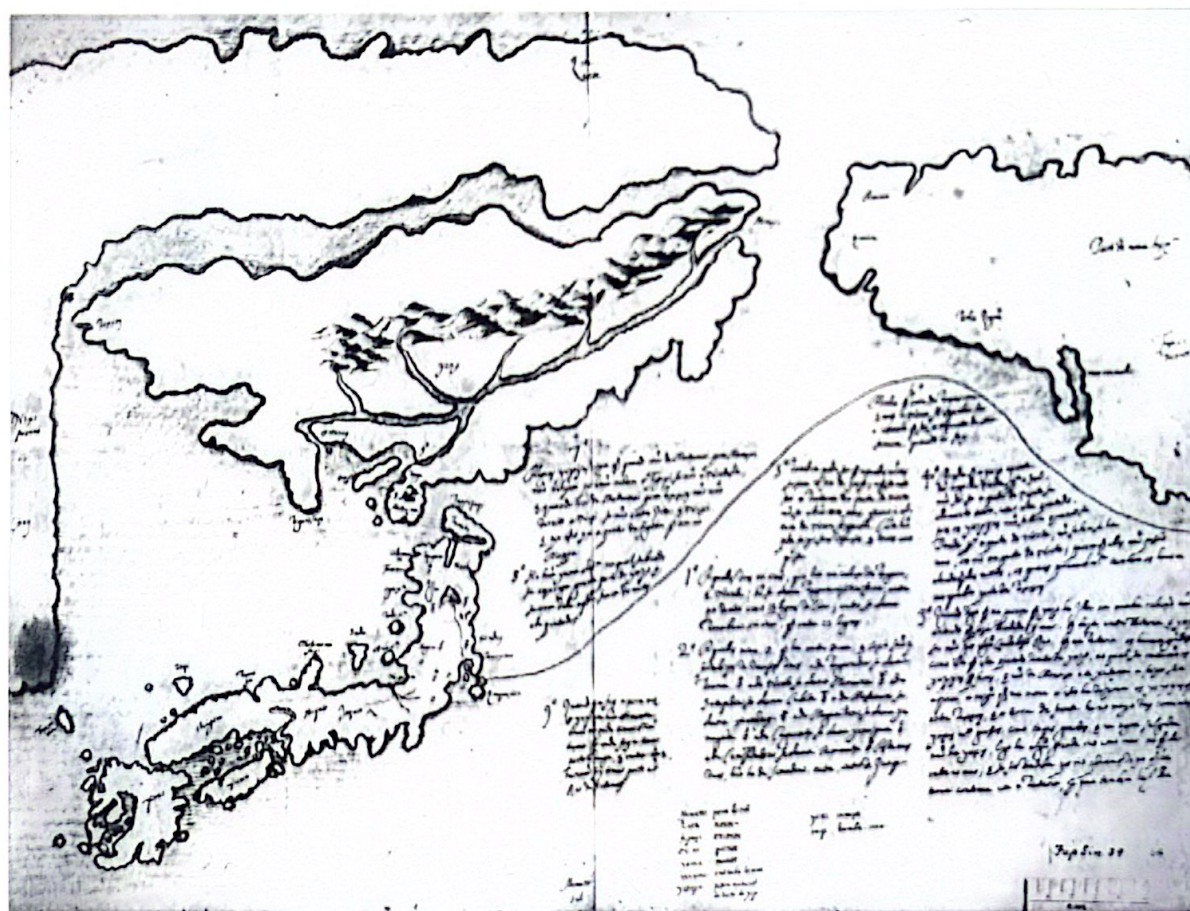
まつまえはん 〈松前藩の成立〉

長い間くり返し起こっていた戦いを、16世紀
のなかごろに蠣崎氏が終わらせました。そして
貿易による利益をアイヌの指導者たちに分け与
え、アイヌの人たちと和人の貿易を自分の城
のある松前だけでさせる決まりを作りました。

蠣崎氏は16世紀の末に苗字を松前氏と改め、
17世紀の初めに江戸幕府ができたときに、アイ
ヌの人たちとの貿易を独占する権利を認める
「黒印状」と呼ばれる文書を徳川家康*からも
らって、松前藩をおこしました。

どくがわいえやす
*徳川家康

江戸幕府をおこし、
その最初の将軍になっ
た人。



写真V-1: アンジェリスの蝦夷地図

17世紀初めに松前を訪れた宣教師がつくった地図

松前藩は、北海道を和人の住む地域である和人地とアイヌ民族^{みんぞく}の住む地域である蝦夷地^{えぞち}とに分け、そのあいだの行き来を厳しく取りしまりました。

このころのアイヌの人たちは、千島列島^{ちしまれっとう}のラッコ^{けがわ}の毛皮や中国^{おりのもの}の織物などを松前に運ぶなど、広い範囲^{はんい}で貿易をしていました。

〈シャクシャインの戦い〉

やがて松前藩は家臣^{かしん}たちに、蝦夷地^{えぞち}の一定の地域^{ちいき}でアイヌの人たちと貿易をする権利^{けんり}を領地^{りょうち}や米の代わりに与えるようになりました。すると、アイヌの人たちはいままでのような自由な貿易ができなくなり、松前藩の家臣とのあいだで自分に不利^{ふり}な貿易をさせられるようになりました。

そして1669年、貿易品の値段^{ねだん}を大きく下げさせられたことがきっかけになって、松前藩^{たい}に対する戦い^{ひき}がシャクシャインに率^{ひき}いられて始まりました。江戸幕府^{えどばくふ}は東北地方^{とうほくちほう}の各藩^{かくはん}に蝦夷地^{えぞち}への出兵^{しゅつぺい}を命^{めい}じ、ついにシャクシャインがだまし討^うちにあって戦いが終わりました。

この戦いのあと、松前藩はアイヌ民族に対する支配^{しはい}を強めていきました。

VI. 13～17世紀の文化

〈擦文文化の終わり〉

擦文文化 ㊦
15ページの本文を
参考にしてください。

擦文文化がいつごろ終わったのかにはいくつかの考えかたがあります。今のところ賛成する人が多いのは、本州との貿易が活発になりさまざまな品物が手に入るようになって、12～13世紀ごろに終わったとする考えです。

オホーツク文化 ㊦
15ページの本文を
参考にしてください。

それより前に、オホーツク文化は、擦文文化に吸収されて終わってしまいました。

本州からきた品物には、漆塗りの食器、鉄の鍋、桶や樽などがありました。その代わりに本州に送られた品物だと考えられているのが、動物の毛皮、干したサケ、昆布などです。

今の函館市にある遺跡からは、北海道での貿



写真Ⅵ-1: 志苔館付近で発見された37万枚のお金

易でもうけたと考えられる37万枚のお金が埋められているのが見つかっています。

〈14・15世紀から江戸時代まで〉

擦文文化が終わると、土器が使われなくなるので、発掘をしても暮らしのようすを示すものがあまり出てこなくなります。

文字の記録が多くなる18～19世紀ごろまでは、アイヌ文化のようすをはっきりと示すのが難しいのですが、どこかで一度に生活のようすが変わるのではなく、長い時間のなかで少しずつ変わっていったのだと考えられています。14世紀のなかごろの記録にえがかれている蝦夷のようすには、18～19世紀ごろのアイヌ文化のようすと共通する部分があります。

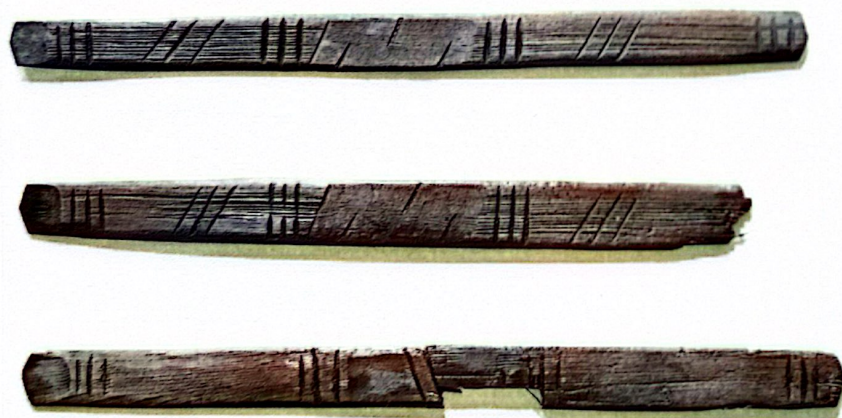
後の時代の記録にえがかれている文化がいつごろ成り立ったのかについては、さまざまな考えがあります。ここではそのなかからいくつか例を出して説明します。

英雄の戦いのようすなどをえがいた物語が現代まで伝わっています。それが擦文文化を営んだ人たちとオホーツク文化を営んだ人たちとの戦いをえがいたものではないかという意見もあり、そうではないという意見もあります。

狩りで捕まえた子グマをしばらく飼ってから、たましいを神の国へ帰す「熊送り」は、アイヌ民族の伝統的な儀式です。似た儀式はオホ

ーツク文化にはありますが、^{さつもん}擦文文化には見られません。そこでアイヌ民族の^{みんぞく}熊送り^{くまおく}をオホーツク文化に^{むす}結びつける考えもあります。しかし、オホーツク文化は擦文文化より早く終わってしまうので、アイヌ民族の熊送りはオホーツク文化とは^{かんけい}関係がないという意見もあります。

また^{さいきん}最近^{はっくつ}の発掘で、アイヌ民族がお酒を神に^{ささ}捧げるときに使う儀式の^{ぎしき}道具^{どうぐ}と同じものが、16^{せい}世紀末^{きまつ}から17世紀初めごろに使われていたことがわかりました。16世紀末の^{じけん}事件について書かれた文書にも同じような儀式の道具のことが書かれています。



写真Ⅵ—2: ^{かみ}上ノ^{くに}国町・^{かつやまたて}勝山館付近で出土した^{ぎしき}儀式の道具

17世紀な
かごろに船
^{ほっかいどう}で北海道に
やってきた
オランダ人
の^{きろく}記録のな
かに、アイ
ヌの人たち
がとりでや
^{さくがこ}柵囲いのよ

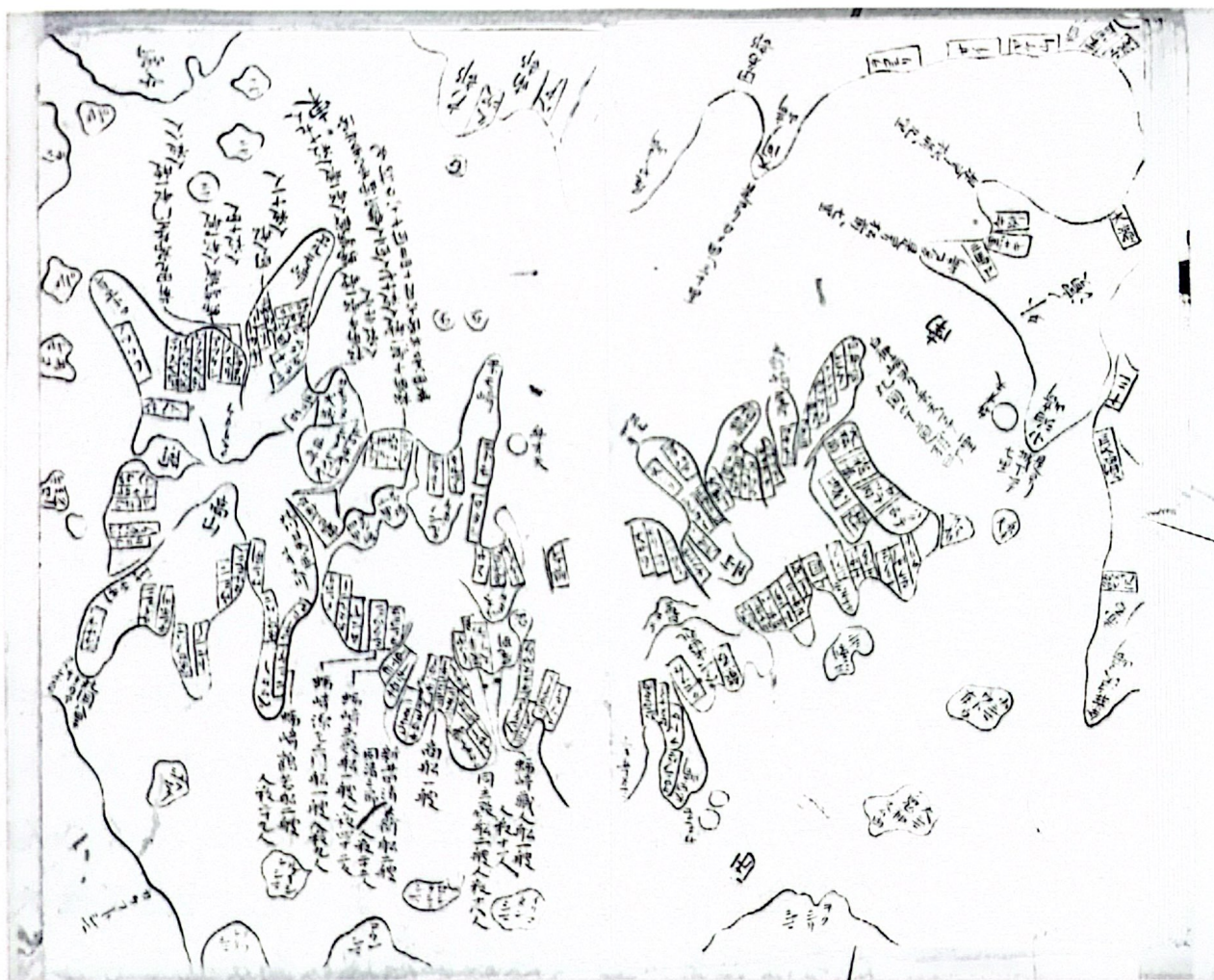
うなものを^た建てていることが書かれています。そうしたとりでのことは、18世紀以後の^{わじん}和人による記録などにも出てきます。

Ⅶ. 17～19世紀の政治・社会

〈シャクシャインの戦いから18世紀なかごろまで〉

17世紀のアイヌ社会には、大小さまざまな指導者たちがいました。この指導者たちは和人の貿易を指揮してたくさんの財産を持ち、政治的にも力を持っていました。

写真Ⅶ-1: シャクシャインの戦いについて書かれた文書にのっている地図



シャクシャインの戦いのあと、和人に都合のいいように貿易が進められるようになり、貿易の品物の値段もむりやり下げられました。それでもアイヌの人たちは貿易をやめませんでしたし

シャクシャインの戦い
21ページの本文を
参考にしてください。

た。長いあいだ^{つづ}続けてきた和人^{わじん}との貿易^{ぼうえき}は、どうしても必要^{ひつよう}なものになっていたのです。

18世紀^{せい}には、和人^{しやうにん}の商人がアイヌの人たちとの貿易を引き受け、もうけたお金の一部を松前藩^{まつまえはん}やその家臣^{かしん}に納め^{おさ}めるようになりました。そしてだんだんと、商人たちはアイヌの人たちを働^{はたら}かせて漁業^{ぎよぎよう}をし、もうけを大きくしようとするようになりました。

それでも18世紀の前半までは、松前藩や商人があまり活動^{ちいき}していない地域がありました。

〈18世紀の後半〉

18世紀のなかごろには、和人の活動がサハリン^{からふと}（樺太^{ちしま}）や千島^{およ}にも及びました。しかし、アイヌの指導者^{しどうしや}たちは強い力をまだ持っていました。国後島^{くなくしりとう}の指導者ツキノエは、和人の商人との交易^{こうえき}を何年ものあいだ断^{ことわ}りつづけ、それからようやく始めることにしました。松前藩にも「蝦夷地^{えぞち}での争い^{あらそ}ごとの解決^{かいけつ}はアイヌの人たちにまかせる」という決まりがありました。

だんだん松前藩や家臣たちは商人にたくさんのお金^{もと}を求めようになりました。そして商人たちはアイヌの人たちを無理^{むり}に働かせてもうけようしました。アイヌの人たちをおどしたり殴^{なぐ}りつけたり、奥^{おく}さんをうばったりする和人もいました。

1789年に、国後島とその対岸^{たいがん}の北海道^{ほっかいどう}でアイ



西蝦夷奥・モッペ酋長
コタンビル像

写真Ⅶ-2：18世紀
後半頃の留萌の指導
者コタンビル

ヌの人たちが立ち上がり、ひどい振る舞いをして
いた和人たちを殺しました。「クナシリ・メ
ナシの戦い」です。

しかし、ツキノエたちは和人との貿易をやめ
ることができなくなっていました。そして立ち
上がったアイヌの人たちを説得して、松前藩と
話し合いをしようとなりました。ところが松前藩
は、すぐに戦いの指導者たちの首を切って殺し

てしまいました。

蝦夷地

21ページの本文を
参考にしてください。

〈クナシリ・メナシの戦いの後〉

戦いの後、蝦夷地の太平洋側は幕府の領地に
されました。幕府は、アイヌの人たちと直接貿易
をしようとしたり、和人風の暮らしぶりを押し
つけようとした。しかしうまくいかず、
結局商人に頼ることになりました。

その後幕府は、いったん蝦夷地の太平洋側を
松前藩に返しましたが、やがて蝦夷地全体を領
地にしました。しかし政治は変わりませんでした。
厳しい労働や病気などでアイヌ民族の人口
は減り、家族や村がばらばらにさせられること
もありました。

それでもアイヌの人たちが仲間や自分たちの
暮らしを守ろうとしているようすが、江戸時代
の終わりごろの本に書かれています。

〈明治時代のはじめ〉

明治時代になって何年かして、アイヌの人たち
を強制的に働かせるのをやめさせるような政
治が行われたり、アイヌの人たちが自分で漁業
を始めることのできるようなしくみが作られたり
するようになりました。

しかしそうした政治は、アイヌ民族の地位を
高くするためではなく、民族としての独自性を
なくすためのものでした。

VIII. 17～19^{せい き}世紀の文化

『オムシャ図』に見るアイヌ文化

これらの図は、19世紀のなかごろ、明治維新^{めいじ いしん}の少し前にえがかれた『オムシャ図』という絵の一部分です。

オムシャとは、もともとアイヌの人たちと和^わ人との貿易のときの儀礼^{ぎれい}だったと考えられています。しかし和人は、そういう儀礼^{りよう}を利用して、アイヌ民族への支配^{しはい}を強めていきました。そしてこの絵がえがかれた時代^{じだい}には、和人がアイヌ民族^おを押さえつけて支配^{しめ}していることを示す儀礼になりました。

この絵にえがかれている儀式^{ぎしき}には近くの村々からアイヌの人たちが集められています。和人の武士^{ぶし}や商人は、アイヌの人たちを漁業の仕事場の近くに集めて働かせ、そこで指導者^{しどうしゃ}を任命^{にんめい}するようになりました。その指導者^{どげざ}たちが土下座^{あいさつ}で挨拶させられています。土下座は、アイヌ文化にはない挨拶のしかたです。

漆塗りのいれもののなかにはお酒が入っています。その上に乗っているのはたばこです。



写真Ⅷ—1:オムシャ図
(部分図)



写真Ⅷ-2:オムシャ図(部分図)

これらは和人からアイヌの人たちに渡される品物です。お酒は儀式での神への捧げものでした。しかし和人は、お酒を悪く使って、戦いのあとの話し合いのときにアイヌの人たちにお酒を飲ませ

てだまし討ちにしました。

貿易のあいだがらが対等だったころは、漆の入れ物の多くは作りのみごとなもので、豊かさをあらわすものでした。しかし商人たちが蝦夷地での商売を引き受けるようになるとやがて、質の悪い品物がアイヌの人たちに渡されるようになりました。

さまざまな材料で作った着物もえがかれています。背、そで、すそ、えりには模様がしゅうされています。オヒョウの木の内皮をせんいにして織った着物も見えます。和人から手に入れた木綿で作った着物もあります。

子どもたちは前髪と耳のところの髪を残してあとは剃りあげています。女の人には「おかっぱ」のような髪型にえがかれています。

銀などで作った耳輪をしている人がいます。女の人のお口や手には入れ墨があります。

蝦夷地

21ページの本文を参考にして下さい。

〈家と暮らし〉

家のなかは一つの大きな部屋^{へや}で、まん中にいろりがありました。家のまわりには祭壇^{さいだん}のほかに倉^{くら}、子グマの檻^{おり}、便所^{べんじょ}などを建てました。

このころのアイヌ民族^{みんぞく}は、狩りをしたり、魚をとったり、木の実や山菜^{さんさい}をとったりし、そのほかに少し畑^{たがや}を耕していたとしばしば言われます。しかし、貿易をすることも大切でした。そしてやがては商人のもとで働^{はたら}かされるようになってしまいました。

狩りの獲物^{えもの}はクマやシカのほかさまざまな動物でした。弓や仕掛け弓^{しかけゆみ}*でとることもあり、冬眠中の巣穴^{すあな}を襲^{おそ}ったりおおぜいで追いつめて狩^かることもしました。

*仕掛け弓

動物がとおると矢^やがひとりでに弓から発射されるしくみのわな。

魚は、川をせき止めたり、突^ついたり、釣^つったり、網^{あみ}でとったりしました。サケをはじめ、マス、シシャモなどさまざまな魚をとりました。

アワやヒエなど穀物^{こくもつ}の栽培^{さいばい}も古くから行っていました。

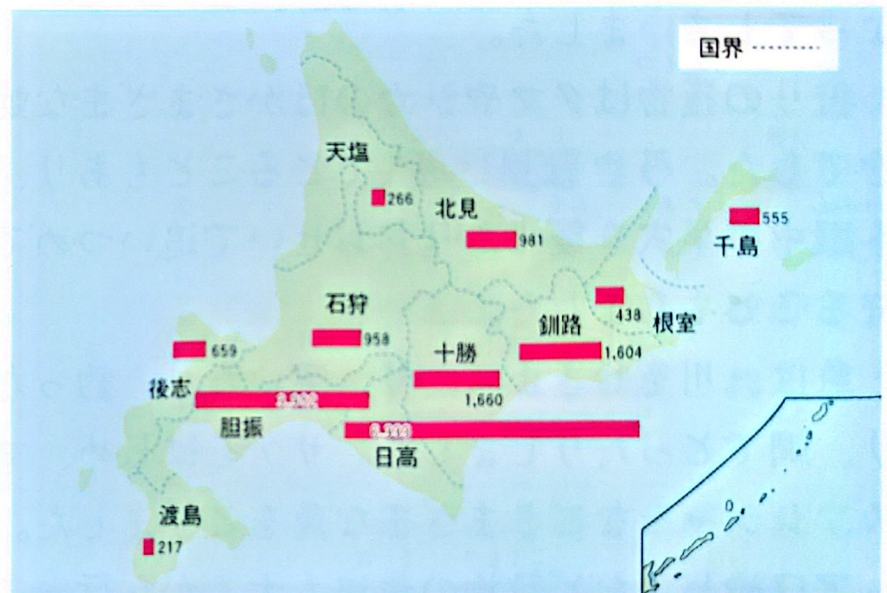
〈物語〉

アイヌ語の物語にはさまざまな種類^{しゅるい}があります。動物や植物などの神々^{とうじょう}が登場する物語、超人的な英雄^{じんてき}が敵^{えいゆう}と戦^{てき}う物語、ふつうの人間が登場する物語などがあります。これらの物語は口で語り、それを聞いて楽しむものでした。

IX. 明治・大正から戦前までの政治・社会

〈アイヌ民族の日本国民化と開拓〉

明治時代に入ると、政府は蝦夷地を北海道と呼び改め、一方的に日本の一部としました。そしてアイヌ民族の戸籍を作成して日本の国民だとしました。しかしアイヌ民族を「旧土人」と呼び、和人とは差別し続けました。



図IX-1:アイヌ民族の人口分布
1898 (明治31) 年

北海道を治めるために置かれた役所である開拓使は、アイヌの言葉や暮らしを和風化して民族としての独自性をなくす政策をとりましたが、これは、まだあまり広がりませんでした。

開拓使は、アイヌの人たちが利用してきた土地を取り上げて国の財産だとしたうえで、民間に売り払うことにしました。またサケ漁やシカ猟を北海道の産業にするために、アイヌの人たちが行ってきた川での漁を禁止したり、シカ猟

を禁止したりしました。

このように開拓を優先した結果、アイヌの人たちは食べるものに困るようになりました。農業を教える事業が行われたりもしましたが、急に暮らしのしかたを変えるのは多くの場合難しいことでした。そしてアイヌの人たちは財産を管理する能力がないと決めつけられ、土地を自分のものにするのを認められませんでした。

日本政府は、ロシアとのあいだでサハリン(樺太)や千島列島の国境についての条約を結ぶと、サハリン(樺太)や千島に住んでいたアイヌの人たちをむりやり北海道や色丹島*に住ませました。そして、移り住んだ人たちは急な生活の変化や病気の流行などに苦しみ、多くの人が亡くなりました。

〈開拓の本格化と「北海道旧土人保護法」〉

1886(明治19)年には北海道庁が置けました。道庁は土地の民間への引き渡しと開拓をさらに進め、アイヌの人たちの住む場所を狭めました。

こうした政策のなかでアイヌの人たちが暮らしに困るようになると、1899(明治32)年に「北海道旧土人保護法」が作られました。この法律は、農業のための土地を与え日本語や和人風の習慣による教育を行うことで、アイヌ民族の独自性をなくすためのものでした。

土地を与えられたアイヌの人のなかには農業

しこたんとう
*色丹島

北海道の東側、根室半島の近くにある島。

経営に成功した人もいましたが、農地にするこ
とに失敗して土地を取り上げられたり、はじめ
から農業に向かない土地を与えられた人もいま
した。また与えられた土地は、和人に与えられ
た土地に比べはるかに狭いものでした。

学校を建設するときには、子どもに教育を受
けさせようと、寄付をするアイヌの人もいまし
た。しかし学校では日本語や和人風の生活のし
かたを覚えなければなりませんでした。

〈大正時代から戦争中の時代〉

1910年代から1930年代ごろには日本に自由な
雰囲気（ふんいき）が広がり、アイヌ民族（みんぞく）の活動も活発にな
りました。町や村の議員（ぎいん）に当選（とうせん）する人もいました。

昭和の初めには、今の旭川市内（あさひかわ）でアイヌの人
たちが住んでいた土地が取り上げられそうにな
りました。アイヌの人たちは、代表（だいひょう）が東京（とうきょう）で反
対運動（たいうんどう）をするなどして、土地が取り上げられる
のを防（ふ）ぎました。

昭和になって「北海道旧土人保護法（ほっかいどうきゅうどじんほごほう）」による
事業（じぎょう）はだんだん行われなくなりました。それで
も、アイヌ民族（みんぞく）は社会（しゃかい）のなかで不利（ふり）な立場（たちば）に置
かれ、差別（さべつ）されていました。

戦争（せんそう）のときには、アイヌの人（ひと）も和人（わじん）と区別（くべつ）な
く兵隊（へいたい）に取られ、戦場（せんじょう）に行きました。

X. 現代の政治・社会

〈国内の政治の動き〉

1945(昭和20)年、日本が戦争に負けてすぐ、アイヌ民族が社会的地位を高めて誇りある民族となることなどを目指して、北海道アイヌ協会(今の北海道ウタリ協会)が設立されました。そのころ日本では、地主から土地を取り上げて農民に安く売り渡す政策が進められました。「北海道旧土人保護法」で与えられた土地が、この政策で取り上げられることもありました。

1960年代から、アイヌ民族の不利な立場を少しずつよくするために、さまざまな施設が作られるようになりました。1974(昭和49)年からは、暮らしや教育をよくするためにお金を借りたりすることができる制度も作られました。アイヌの人たちは日本の各地に住むようになっていましたが、これらの制度は北海道だけで実施されました。失われかけていた昔の文化などを取り戻す活動も始まりました。

1984(昭和59)年に北海道ウタリ協会は、アイヌ民族の人間としての権利を取り戻し差別をなくすこと、暮らしや教育をよくすること、アイヌ文化を伝えていくこと、アイヌ民族やアイヌ文化についての政治にアイヌ民族の意見を取り入れること、などを求めた「アイヌ新法」案

 北海道旧土人保護法
33ページの本文を
参考にしてくださ
い。

を作りました。そしてこの「アイヌ新法」の制定を北海道や政府・国会などに働きかけていきました。

*新しい法律

正式な名前は「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」と言います。

この運動に対して、1997（平成9）年、国会は「北海道旧土人保護法」を廃止し、新しい法律*を作りました。北海道ウタリ協会の「アイヌ新法」案のなかの「アイヌ文化」の一部分だけを法律にしたものです。

〈国内の社会の動き〉

さまざまな制度が作られても、アイヌ民族は社会のなかで不利な立場に置かれ続けました。差別もまだなくなっていない。こうした不利なところや差別などはこれからなくしていかなければなりません。

〈国際政治とアイヌ民族〉

ここで「民族」という言葉の意味を考えてみましょう。たとえば「アイヌ民族」とは、血が繋がっていたり同じような言語や生活習慣などを持っていたりする人たちで、「自分たちはアイヌ民族だ」と考えている人たちのことだと言われています。一つの国のなかには、一つの民族だけが住んでいるわけではありません。日本国民だからといって同じ民族であるとは限りません。

アイヌ民族は、自分たちの土地に古くから暮らしていながら、今日本のなかで不利な立場に置かれています。国連*などではこうした民族のことを「先住民族」と呼んでいます。

今国連では、さまざまな国のなかの先住民族が失った権利をどうやって取り戻すか、話し合いが進められています。アイヌ民族と日本政府も、この話し合いに参加しています。

国連

国際連合。平和と人びとの権利を守ることを目的として、世界のほとんどの国が集まって話し合っています。



写真X-1:1992年12月10日国連「世界の先住民の国際年」開幕式典
当時の北海道ウタリ協会理事長野村義一さんの記念演説

XI. 近代・現代の文化

この100年間くらいで、アイヌの人たちもいろいろな仕事を持ち、それぞれの場で活躍するようにになりました。ここでは、何人かのアイヌの人たちの生き方を知ることで、新しいアイヌ文化について考えたいと思います。

大川原コビサントクさんは、1874（明治7）年、鷗川に生まれました。100頭もの馬を飼ったりして、たくさんの土地を持つようになりました。村会議員として村人をたすけ、お米がとれなかった年には村人のために食料を買いました。毎朝4時に馬に乗って、村人に早起き

を呼びかけて歩いたという話も残っています。鷗川町内の神社には今でもコビサントクさんをほめたたえる石碑が立っています。



写真Ⅺ-1: 山本多助さん
1936（昭和11）年頃の
山本多助さんのご家
族。左端が山本多助
さん。

山本多助さんは、
1904（明治37）年、釧

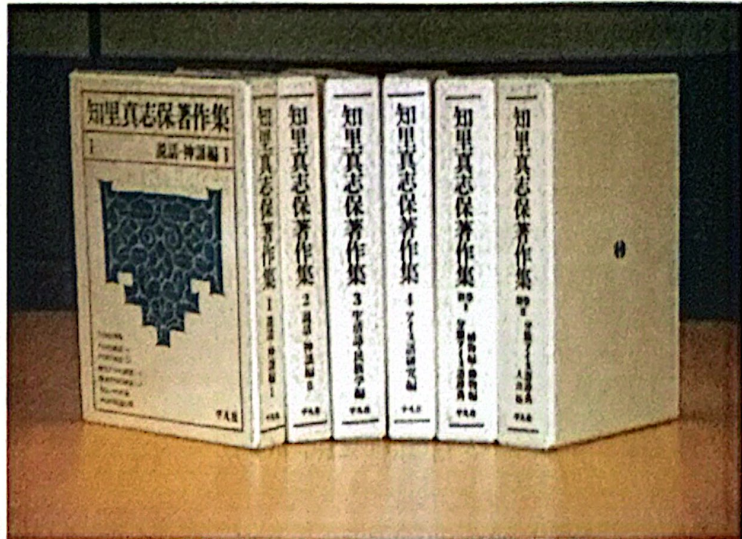
路市で生まれました。小学校ではアイヌ語を使うと怒られたので、学校では日本語、家ではアイヌ語、と二つの言葉を使い分けて育ちまし

た。やがて、木彫りの民芸品を作ったり、伝統的な踊りを伝えるための会を作ったりしました。阿寒湖のマリモ祭りも発展させました。アイヌの勇者の物語劇「アイヌラックル伝」をフランスのパリで公演したときは、大評判になりました。多助さんはアイヌ文化を伝えるために多くの本を書きのこして88歳で亡くなりました。

知里真志保さんは、1909（明治42）年、今の登別市に生まれました。『アイヌ神謡集』という本で有名な知里

幸恵さんは、彼のお姉さんです。真志保さんは、室蘭中学を卒業してから東京に出て、第一高等学校に入学しました。英語やドイツ語はいつもトップだったそうです。東京帝国大学（今の東京大学）に入学してから、本格的にアイヌ語の研究を始め、たくさんの論文を発表しました。真志保さんは北海道大学の教授になりましたが、52歳で亡くなりました。

山丸武雄さんは、1914（大正3）年、白老町で生まれました。13歳から、夏の間はお父さんといっしょに大型船に乗り、カムチャッカへ鮭



写真XI-2: 知里真志保著作集全6巻

りょうに行きました。その後も^{ぎょぎょう}漁業を^{つづ}続けましたが、33歳からの40年間は、村会議員としても^{かつ}活躍しました。また、1年間に何十万人もの^{かんこう}観光客を受け入れるため、昔から^{つた}伝わる草^なぶきの家々を湖のそばにたて、ポロトコタンと名付けま

した。1984（昭和59）年には、^{ねん}念願の「アイヌ^{みんぞくはくぶつかん}民族博物館」もつくりましたが、1994（平成6）年、80歳で亡くなりました。



写真Ⅹ-3:平 三雄さん
平さんがツブかご漁をしている様子。

平 三雄さんは、1928（昭和3）年、^{むろらんし}室蘭市で生まれました。小学校を^{そつぎょう}卒業したのは、戦争が^{せんそう}激しくなった^{ころ}頃で、船で^{せきたん}石炭を運ぶ仕事をしました。戦争が終わってからは、ニシンやカレイ、ツブをとりました。やがてホタテ貝の^{ようしよく}養殖を

始め、自分の船も持てるようになりました。お父さんは、^{せいしき}正式なカムイノミ（神さまへ^{いの}祈ること）ができた人だったので、三雄さんも小さいときからアイヌ風のお葬式^{そうしき}のお手伝い^{てつだ}をしたりして育ちました。室蘭に伝わるアイヌ文化をもっと学んで、若い人たちに^{つた}伝えていきたいと三雄さんは語っていましたが、2001（平成13）年、73歳で亡くなりました。

XII. アイヌ語

〈アイヌ語とは〉

アイヌ語は、現在日本と呼ばれている地域で
むかしから使われてきました。しかし下の例の
ように、アイヌ語と日本語とは大きく違う言葉
です。

顔—ナン	目—シク	耳—キサラ	鼻—エトウ
手—テク	指—アシケペツ	胸—ペンラム	腹—ホン

〈アイヌ語の話されていた地域、 話されている地域〉

アイヌ語はかつて北海道全体、サハリン（樺
太）南部、千島列島、および本州の一部で話さ
れていました。本州のアイヌ語については詳し
いことはわかっていません。

千島列島の北のほうに住んでいたアイヌの人
たちは、明治時代におりやり南のほうに移住さ
せられました。サハリン（樺太）のアイヌ語の
話し手も、日本が戦争に負けたときに多くは北
海道に移ってきました。

以前は北海道全体でアイヌ語が話されていま
したが、今アイヌ語をなめらかに話せる人の数
はとても少なくなったと考えられます。

千島列島の
アイヌの人たち
33ページの本文を
参考にしてくださ
い。

東北地方の
アイヌ語地名
13ページの図Ⅲ—
1を参考にしてく
ださい。

〈アイヌ語地名〉

^{ほっかいどう}北海道の地名の多くはアイヌ語でつけられた
ものです。^{とうほくちほう}東北地方の北部にもアイヌ語地名が
たくさんあります。アイヌ語の地名の成り立ち
の説明は多くの人によって行われていますが、
正しいものはごくわずかです。

〈アイヌ語はどんな言葉か〉

アイヌ自身がアイヌ語を文字で書くことは大
正時代^{しやう}ごろから行われてきました。今はカタカ
ナやローマ字で書くのがふつうです。

アイヌ語は日本語の話し手にとってはわりあ
い発音しやすい言葉です。ただ、アイヌ語とし
ては別な発音^{べつ}なのに日本語の話し手には同じよ
うに聞こえ、聞き分けるのが難しい音もありま
す。

アイヌ語で言葉を並べる^{なら}順序^{じゆんじょ}は日本語とわり
によく似^にています。しかし、ひとつひとつの言
葉の組み立てかたなどは、日本語と大きく違^{ちが}い
ます。

〈アイヌ語の過去と現在〉

現在、なめらかにアイヌ語を話せる人の数はとても少ないと考えられています。

それは、明治時代から今までアイヌ民族が民族としての独自性をうばわれ、学校で日本語を教えられ、アイヌ語を話せる社会がなくなつて、日本語を使わないと暮らしていけないようになったからです。アイヌ語が力を取り戻すためには、アイヌ民族の暮らしや立場をよくすることが大切です。

〈アイヌ語を守るための動き〉

アイヌ語を後の時代に伝えようとする人は、大正時代ごろからいました。そして1987（昭和62）年から北海道ウタリ協会がアイヌ語教室を開き、教科書も作られました。

1997（平成9）年に作られた法律でも、アイヌ語についての事業を行うことになりました。これらの事業が、アイヌ語を発展させようとするアイヌ民族の活動とどう結びつくかがこれからの課題です。

 1997(平成9)年の法律
36ページの説明を
参考にしてください。

XIII. 北海道のヒト —骨の特徴から考える—

日本列島のヒトの歴史を考えるときには、昔からアイヌの人たちが注目されてきました。

アイヌの人たちの骨格は次のような特徴を持っています。頭が長く、眉の骨が張り出している。顔の骨は横幅が大きく、顔の高さはやや低い。鼻の付け根が深くへこみ鼻は高い。手足の先の部分が長い。つまり足はひざから下が長く、腕はひじから先が長い。

北海道内で発見された人骨の特徴を、古い順に見ていきましょう。

- 1 土器を使い始める前の時代の人の骨は、まだ発見されていません。
- 2 縄文時代の、とくに北海道の北部と東部の人の骨は、後の時代のアイヌの人たちの骨の特徴によく似ています。けれども北海道ではまだ、縄文時代の人の骨はそれほど多く発見されていません。
- 3 続縄文時代の人の骨は、北海道の南部でも、後の時代のアイヌの人たちに似てきます。
- 4 擦文時代の人の骨は、ほんの少ししか見つかっていませんが、後の時代のアイヌの人たちと共通の特徴があります。

- 5 オホーツク文化人がどこからやってきたのかについては、まだよくわかりません。彼らは大きく^{ひら}平べったい顔で、肘^{ひじ}から先^{ひざ}や膝^{みま}の下が短いという特徴を持っています。これは、北海道のアイヌ民族とは正反対です。このことから、昔、北海道やサハリン（樺太）にはアイヌ民族とは違う人^{ちが}たちも住んでいたことがわかります。
- 6 オホーツク文化の時代や擦文時代が終わってからの時代を生きていた人たちは、ますます後の時代のアイヌの人たちと同じ特徴を持つようになりました。

しばらく前まで、アイヌの人たちは「ヨーロッパ人」の仲間^{なかま}だと思われていたことが多かったのですが、ここ数十年^{ちよう さ けんきゆう}の調査研究により、「アジア人」の仲間であることがわかってきました。そして、日本列島の縄文時代人^{じようもん じ だいじん}の一部が、アイヌ民族の祖先^{そ せん}だといわれるようになりました。

では、その縄文時代人の祖先はどこからやってきたのでしょうか。遺伝子^{いでん し}の研究では、アジアの北の方だという説^{せつ}が有力ですが、別の研究^{べつ}では東南アジア^{とうなん}だという説もあり、まだはっきりしたことはわかりません。

●この本をつくるために参考にした資料

図Ⅰ—1：細石刃／鶴丸俊明氏提供の図版「細石刃の利用」（1998「先史時代のたんの」『新端野町史』）より作図

図Ⅰ—2：約2万年前の日本列島／鶴丸俊明氏提供の図版 「日本列島の約2万年前」（湊正雄文献より）を参考

図Ⅱ—1：土器の形にあらわれる道南と道東の違い／鶴丸俊明氏提供の図版「北海道東西の土器」より作図

写真Ⅱ—1：土器につけられた動物のかたち／北海道立埋蔵文化財センター蔵

図Ⅲ—1：東北3県（青森県、秋田県、岩手県）にあるアイヌ語地名／（角川書店『新版 古代の日本⑨ 東北・北海道』1992より作図、原図は『アイヌ語地名の研究』1, 1982, 山田秀三より吉田歓氏作図）

図Ⅳ—1：擦文文化とオホーツク文化の住居／北海道開拓記念館提供の図版より作図

図Ⅳ—2：続縄文、擦文、オホーツク文化期の北海道の主な遺跡／菊池徹夫氏提供の図版より作図

図Ⅴ—1：アイヌの人たちは、このころ太い線のような道すじをたどっていたようだ。／中村和之氏提供の図版「13～16世紀の環日本海地域とアイヌ」（大隅和雄・村井章介編『中世後期における東アジアの国際関係』山川出版社所収、1997年）より作図

写真Ⅴ—1：アンジェリスの蝦夷地図

写真Ⅵ—1：志苔館^{しのりたて}付近で発見された37万枚のお金／市立函館博物館蔵

写真Ⅵ—2：上ノ国町・勝山館^{かみくに かつやまたて}付近で出土した儀式の道具／上ノ国町教育委員会蔵

写真Ⅶ—1：シャクシャインの戦いについて書かれた文書にのっている地図／東京国立博物館蔵「津軽一統志」より

写真Ⅶ—2：18世紀後半頃の留萌の指導者コタンビル／天理大学附属天理図書館蔵 福士廣志編著「留萌いまむかし」より

写真Ⅷ—1：オムシャ図（部分図）／国立スコットランド博物館蔵

写真Ⅷ—2：オムシャ図（部分図）／国立スコットランド博物館蔵

図Ⅸ—1：アイヌ民族の人口分布1898(明治31)年／山田伸一氏提供（北海道編『新北海道史』第9巻、1982年より作成）

写真Ⅹ—1：国連「世界の先住民の国際年」開幕式典／写真提供 UN—DPI

写真Ⅺ—1：山本多助さん／写真提供 チカップ美恵子氏

写真Ⅺ—2：知里真志保著作集全6巻

写真Ⅺ—3：平 三雄さん／写真提供 平 三雄氏

平成12年 編集委員

委員長 奥田 統己
委員 阿部 一司
澤井 政敏
スチュアート ヘンリ
チカッブ 美恵子
本田 優子
横山 むつみ

アイヌ民族：歴史と現在

－未来を共に生きるために－

発行年月	2001年3月	第一刷	2006年2月	第六刷
	2002年1月	第二刷	2007年2月	第七刷
	2003年2月	第三刷		
	2004年2月	第四刷		
	2005年2月	第五刷		

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目プレスト1・7(7階)

TEL (011) 271-4171 FAX (011) 271-4181

URL <http://www.frpac.or.jp/> E-mail: ainu@frpac.or.jp



学校名		氏 名
-----	--	-----